

九州アメリカ文学会 7月例会

日時：2024年7月28日（日）15時00分～18時00分

場所：アクロス福岡 607 会議室

【特別講演】15時00分～16時00分

巽孝之（慶應義塾大学名誉教授／慶應義塾ニューヨーク学院長）

「批評理論と文学史の交わる場所」

【シンポジウム】16時10分～18時00分

「アメリカ文学と批評理論のこれから」

司会・講師 渡邊真理香（北九州市立大学）

「インターセクショナルリティから考えるアジア系アメリカ文学
——*Light from Uncommon Stars*における多層的な生」

講師 岡本太助（大阪大学）

「現代の悲劇はクリシェとなり果てたか——*The Goat Or, Who Is Sylvia?* から読み直すパロディと間テクスト性」

講師 鈴木章能（長崎大学）

「日本人がアメリカ文学を読み、語るということ——ポストコロニアリズム・世界文学を経由したグローバル・アメリカ」

【懇親会】18:30～

会場：オ・ボルドー・フクオカ（福岡県福岡市中央区西中洲 6-8）

参加申込は以下のフォームよりお願いします。

<https://forms.gle/KRzfRaW19ffRCt7w7>

回答期限は7月18日となりますが、それ以降に変更がある方は例会担当・松下（matsushita.saya0426@gmail.com）までご連絡ください。変更は7月25日まで受付可能です。当日の飛び入り参加はお断りさせていただく可能性がございますので、事前の申し込みをお願いいたします。

特別講演

批評理論と文学史の交わるところ

巽 孝之

(慶應義塾大学名誉教授／慶應義塾ニューヨーク学院長)

9.11 同時多発テロ以後、アメリカ合衆国を脱中心化する「トランスナショナル・アメリカン・スタディーズ」の方法論が勃興する。シェリー・フィッシャー・フィッシュキンの提唱で私を含む編集委員が招集され、2009年に新しい学術誌 *Journal of Transnational American Studies* が創刊された。その十周年記念出版が *The Routledge Companion to Transnational American Studies* (2019) であり、昨年にはその成果をふまえた教科書『批評理論を学ぶ人のために』(世界思想社、2023年)が出て、筆者も二章を書き下ろした。

しかし今年、邦訳を上梓したボストン大学歴史学教授ブルース・シュルマンの『アメリカ70年代』(原著2001年、国書刊行会、2024年)は、地域研究と時代研究のみならず批評理論と文学史の交わる地点を再検討する意味でも多くの刺激を与えてやまない。以上の角度から、21世紀批評の歩みと展望を概観する。

シンポジウム

「アメリカ文学と批評理論のこれから」

インターセクショナルリティから考えるアジア系アメリカ文学

——*Light from Uncommon Stars* における多層的な生

渡邊 真理香 (北九州市立大学)

1989年に Kimberlé Crenshaw によって提唱された「インターセクショナルリティ(交差性)」は、複合的で複雑な差別の構造へ我々の目を向けさせることに成功した。もちろん、インターセクショナルリティという言葉が生まれる以前は多層的な生のありようが無視されていたという訳ではない。日系二世作家 Wakako Yamauchi が日系と女性という交差の苦しみを描いたように、アジア系文学では交差性は重要なテーマであって来た。一方で、アジア系文学にも主流が存在し、アジア系というエスニシティを語る主体を制限してきたことも事実である。その排他性によって周縁化されてきたのが、セクシュアル・マイノリティの物語である。1990年代以降は、セクシュアル・マイノリティの存在を必然的に描く作家があらわれ、アジア系クィアの交差性がそれまで以上にはっきりと浮かび上がるようになった。本発表では、トランスジェンダーの少女を主人公とする SF ファンタジー小説 *Light from Uncommon Stars* (2021) を取り上げ、登場人物たちがどのような交差を生きているのか考察してみたい。

現代の悲劇はクリシェとなり果てたか

——*The Goat Or, Who Is Sylvia?* から読み直すパロディと間テキスト性

岡本 太助 (大阪大学)

1980年代以降、アイロニー、間テキスト性、翻案に関する批評を継続的に展開した Linda Hutcheon の問題意識の中心には、芸術におけるポストモダン・パロディとは何かという問いがあり、そこには Fredric Jameson に代表されるポストモダニズム論 (標的を失った空疎なパロディとパステイージュ) への明確な反駁を見て取ることができる。それはポストモダンの Poetics から Politics への重点のシフトにほかならず、adaptation と appropriation の差異とも連動している。いわばクリシェと化し批判的機能を喪失したパロディを現在の文脈において再活性化させようとするこの試みは、劇作家 Edward Albee の問題作 *The Goat Or, Who Is Sylvia?* が標榜する “Notes Toward a Definition of Tragedy” と呼応するのではないかというのが、本発表において論証したい仮説である。堆く積み上げられたパロディの残骸の上に幻出する現代の悲劇を素描してみたい。

日本人がアメリカ文学を読み、語るということ

——ポストコロニアリズム・世界文学を経由したグローバル・アメリカ

鈴木 章能 (長崎大学)

解釈ならびに文学という概念の否定が斥けられ、いわゆるテキストへの回帰や読みの復権が訪れて久しい。もっとも、それは単に昔に戻ることで理論からの解放でもない。むしろ、「読み」を巡る理論的課題は残されたままである。少なくとも日本人にとってアメリカ文学とは国民文学ではなく世界文学であり、従って読みのモードの視点を無視することはできない。かつて日本を訪れた某アメリカ人作家は、日本の英米文学研究者たちに、日本文学をなぜ研究しないのかと言ったようだが、認知言語学やメディア研究的な課題にまで広がる「理解」の溝の問題が念頭にあるようだ。それは理論そのものにも言える。例えばダム ロッシュはかつて文学理論の翻訳と読みのモードの問題を問うていた。こうした課題に対し、地域性は類似性に担保される比較の中に浮かぶものであること、従って「内部者」と「外部者」の視点、地球規模の多様なローカルなまなごしの世界的集約 (世界への発信と協力) を、アメリカ文学の「真」の姿に迫る豊かな知の蓄積の一方法として、人間理解や世界平和への貢献とともに考えたい。そのために世界文学の一方法としての言語対比研究を基とする類似性の対比研究、それを經由した脱オリエンタリズム・脱オクシデンタリズム・脱自民族中心主義 / 「アメリカ」の相対化 (対照的ではなく多元的) / アメリカ文学の理解・理論の適応について (西欧発と思われている世界文学の現代的概念自体の相対化を例にしつつ) 論じてみたい。